

## ディキンソン詩抄訳：281～380番の詩

原口，遼

<https://doi.org/10.15017/2332560>

---

出版情報：文學研究. 91, pp.23-50, 1994-03-25. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# ディキンソン詩抄訳

## — 281～380番の詩 —

原 口 遼

次にはディキンソン詩の281番～380番の詩のうち、これまでに未発表の分の拙訳を掲げる。それらの詩は1861～1862年に製作されているが、ディキンソンは当時30、1歳で、最も多作であった時代である。この間の番号の詩のうち、すでにこれまでに訳出掲載した詩は『文学研究』86輯、87輯、88輯、89輯、90輯、及び『九大英文学』32号、35号に分載しているので、そちらを参照されよ。読者閲覧上の便宜のため、これまでに訳出発表した詩、および本号にて訳出した詩の番号の一覧表を、末尾に付録として掲げた。（但し281～380番の詩）

[281] それは余りにも恐ろしいので、むしろ心は踊る。

恐怖をはるかに越えているので、半ば魅了する。

魂がそれ見つめる続けると、むしろ安心する。

墓は霜のことを、もはや恐れはしない。

幽霊をあれこれ調べると気を失いそう。

でも聞えば征服できる。

今では苦悶も何と楽なことか。

宙ぶらりんの精神状態がそんなにも心を切り刻んでいたのだ。

真実とは、あからさまで冷たいもの。

でもそれでも存在する。

もし誰かがそのことに確信が持てなければ、

私たちはその人たちにお祈りを示そう。  
しかし、事情を心得た私たちは、  
今や希望することすら止めた。

死を見つめることは、死ぬことだ。  
息を止めてもみよ。  
そうすれば頬に当る枕ですら  
あなたの眠りほども深くは眠らない。

他の人たちは、格闘できる。  
あなたたちの闘いは終わったのだ。  
だから荒涼として恐れられた苦しみよ、やって来よ。  
来れば恐ろしさは解き放たれる。  
そして恐怖も消える。  
それこそ陽気で妻まじい祭日だ。

[282] 人々と<sup>すばる</sup>鼎座とは何と人知れずに存在していることか。  
あるとき空が突然に、  
人が一人視界から、  
永遠に奪われたという事実を明らかにするまで。

見えざる者たちは、  
私たちが見つめるとき、  
果てしなき機会のうちに、追いつかれることとてなく、  
空気のように存在する。

なぜ私たちは彼らを留めてやれなかったのか。  
天は笑みを浮かべて、  
一言も発することなく、  
失望した私たちの頭上をさっとかすめて通りすぎる。

[283] お妃を動かす態度は、  
半ば子供らしく、半ばはヒロイソ的。  
眼の中の<sup>すもも</sup>李こそが、  
もつとつつましやかな人たちに対して  
そうした態度を不要にする。  
誰も近くにいないとき、  
涙ですら、  
しばしば訪問する。

公爵の帽子、  
みそさざいの鬘ですら、  
通りすがりの人に対して  
その眼ほどに恥ずかしがり屋でもない。  
そして両手はそんなに細くとも、  
妖精を喜びで  
踊り上がらせることだろう。

低く変わり  
耳に乗って行くことができる声、  
雪を溶かすような、  
あるいは王冠の臣下への  
領地の調子のような、  
最高の変化。

恐れるには、余りに小さく、  
愛するには、余りに遠いので、  
それで人々は苦肉の策として、  
ただ崇めるだけ。

[284] 海中で藻掻く、一雫しずくの水は、  
自分が今どこにいるかを忘れている。  
丁度私があなたに対してのと同じように。

彼女は自分のことを小さな香だと知っている。  
でも小さくても、と溜息をつく、もしすべてがすべてなら、  
結局それ以上には大きくなりようもないわけだし、と。

大海は雫の自惚れに微笑む。  
でも雫は海の女神アンフィトリテのことを忘れて、  
懇願する、「私を受け入れて」と。

[285] 駒鳥こそ私にとっては調べの基準、  
なぜなら私は駒鳥と同じ土地で育ったから。  
でも、もし私が郭公に生まれついたら、  
きっと郭公風に歌い、  
お馴じみの賦うたが、真昼を支配することでしょう。  
金鳳花こそ、咲いてほしい私好みの花、  
なぜなら私たちは果樹園で育ったから。  
でも、もし私が英国に生まれたのなら、  
きっと雛菊を追っ払うことでしょう。  
十月には、木の実だけがふさわしい、  
なぜなら木の実を落とすや、  
季節は飛び去ると教わりましたから。  
雪景色のない冬なんて、  
私にとっては嘘っぱち、  
なぜなら私はニュー・イングランド風に見ますし、  
女王陛下だって私と同じようにご覧になられるのですから、  
つまりは、その土地風に。

[286] 後から振り返ってのあの恐怖、他ならぬ私たちに降りかかったのだ。

私たちは朽ちかかった門柱の所を通りすぎたが、  
ちょうどそのとき大理石の小片が落ちかかり、  
おお神よ、すんでのことで命びろい。

もう一瞬遅かったら、私たちは深い所に落ちてしまって、  
漁師が潜水しても届けなかったことだろう。  
そのことをちらと思うだに、  
思い出すだに心が<sup>な</sup>萎える。

警告の鐘さえ鳴らず、  
推測だけが存在する場へと  
行ってしまう可能性は、  
私たちの顔を  
金属的ににやりと笑って、  
突然覗き込む鋼鉄の顔のよう。  
それは歓迎心をねじ込んで来る、  
死の歓待。

[287] 時計が止まった。

炉棚の上の時計ではない。  
ジュネーヴの時計工の最高の技術を以てしても、  
たった今だらんと動かなくなった、  
人形をお辞儀させることはできない。

畏怖が人形の上に現われた。  
数字が苦痛で、身をこごめて、  
十進法から震えながら、  
垂直の真昼へと消えて行った。

医者がやって来ても身じろぎもしない、  
この雪の振り子は。  
この修繕屋が一生懸命直そうとしても、  
冷たく無関心の黙礼が返るのみ。

金メッキの時針分針の黙礼、  
細い秒針の黙礼。  
文字盤の生命と  
「あの方」との間の、  
何十年もの傲慢の時。

[289] 私は道路を少し外れた所に、寂しげな家が二、三軒あるのを知っている、  
泥棒がきつとその外見を気に入りそうな。

門は木製で、  
窓は低く垂れており、  
ベランダへと、  
人を誘う。  
そこに二人の男が忍び込み、  
一人が七つ道具に手を掛け、  
もう一人が覗き込む、  
皆が寝入ったことを確かめるために。  
慣れっこになった眼だから、  
何が起こっても驚きはしない！

夜の台所は何と整然としていることか、  
時計のみが動いているだけ。  
でもチクタクの音には猿ぐつわを噛ませられる、  
鼠も鳴かず、  
壁も話さない。  
何も物音がしない。

半開きの眼鏡がこそっと動く。  
カレンダーが気付く。  
まばたきしたのはマットか、  
あるいは神経質な星か。  
月が、誰かそこにいるのかと思って、  
階段を滑り下りる。

略奪だ。そこには、  
大コップ、スプーン  
イヤリング、宝石、  
時計、お婆さんにお似合いの  
古めかしいブローチがある。  
お婆さんはそこに寝り呆けている。

朝日がひそかに  
カサコソと音を立て始める。  
太陽が三本目の篠懸の木の  
ところまで達した。  
雄鶏が叫ぶ  
「そこにいるのは誰だあ？」

するとこだまがする、汽車が遠くで、  
嘲って答えるのだ「どこだあー！」と。  
一方、老夫婦はちょっと寝返って、  
朝日がドアを半開きにして行ったなと思っている。

[290] 北の空は今夜、  
青銅色に輝いて、  
とてもいい感じの形だ。  
それは予めお互い同士打ち合せをしていて、



驚くことに無縁で、  
宇宙やこの私に対して  
至高の無関心を保ち、  
私の素朴な心を  
荘厳さで染める。  
かくして私は気宇壮大となり、  
人間どもや酸素を  
傲慢だとして軽蔑し、  
私の小道を胸を張って歩く。

私の栄光とて、所詮地上の動物園。  
一方天体の果しなきショーは  
何世紀にも渡って楽しませることだろうが、  
その時、私はとうの昔に、  
草場の蔭の孤島に成り果て、  
私のことを知っているのは、ただ甲虫ばかり。

[291] いか様に山々は夕日でしたたるのか。  
いか様に毒人参は燃えるのか。  
いか様に焦茶色の藪は魔法使いの太陽によって  
身に燃え殻を纏うのか。

いか様に尖塔は紅色を与え、  
丸い玉で一杯になるのか。  
私にはそのことを言い表せる  
フラミンゴの唇を持っているだろうか。

さて、いか様に燃える炎は草々にその色を映しながら、  
大波のように引いて行くのか。  
ちょうど公爵夫人が通り過ぎるときに、

消え去るサファイアの影のようにして。

いか様に黄昏は村に忍び寄り、  
ついに家々は霞み、  
そして持ち運ぶ者が不在ながら、  
奇妙な松明が、  
通りに微光を発するのさ。

鳥の巣や犬小屋にいか様に夜が来るのさ、  
そして、森の中には、  
まさに深淵の丸屋根がお辞儀をして  
孤独がやって来るのさ。

これらのことが音楽家のギドーの脳裏に去来した幻想。  
画家のティツアーノは決して語る事がなかったし、  
同じく画家のドメニティーノは夕日の黄金色に痺れて、  
画筆を取り落としてしまったのだ。

[292] もし神経が、あなたを拒否したなら、  
神経の上手に行くのだ。  
神経が回避することを恐れても、  
神経は墓に寄り掛かることができる。

それは落ち着いた姿勢。  
最上の巨人が造った  
あの真鍮の腕を  
決して撓ませるな。

もしあなたの魂が前後に揺れるのなら、  
肉体の門を上げよ。

臆病者は酸素を欲しがらぬが、  
それ以上は欲しがらぬのだから。

[295] 物語の中にはいつて行くかのように、困難が私を魅了した。

いかにして親類たちが倒れたか、  
兄弟姉妹たちが、栄光と  
若い意志を求めて、  
処刑台や牢獄へと引立てられながらも、歌を歌い、  
ついに、微笑みながら不名誉を乗り越え、  
恥辱も静かに去ったとき、  
神が完全にその姿を現わしたか。

私の苦悶する想像力は、私を想像の冠へと導く、  
綺麗に被られた冠へと。  
下界では、名誉を拒否された  
頭に被られた冠へと。  
そのような精神は、彼女に永久に言及させる。  
私が大胆になり、  
トランペットが鳴り渡ったとき、  
わが磔へと、勇敢に歩み行つたと。

私の足のように小さい足が、革命を求めて行進した、  
太鼓の音にしっかりと合わせて。  
言葉が萎えたときに、  
さほど強くもない手が、証言として振り上げられた。  
明るく訓練され、  
光の方へと、  
エトラスカの招待を  
手招いている彼らの崇高な態度に恥をかかずまい。

[296] 一年前のことを、何と書けばいいのか。  
神よその言葉を綴ってくれ！ 私は綴れない。  
それは恩寵ではなかったか。そうではない。  
栄光ではなかったか。それならよろしい。  
ゆっくりと綴れ、栄光と。

そのような記念日は、  
永遠の中にたまさかにしか顕れない、  
共通の悲嘆から遠く離れているときには。  
見よ！ お互いの顔をじっくりと眺めよ、じっくりと、  
怪しげな食事の間に。その祝宴が  
本物だったら。

私はそのとき呑気そうに味わったが、  
その葡萄酒がこの世に一度しか  
出されないのを知らなかった。あなたは知っていたか。  
ああ、もしあなたが、私にそのことを知らせてくれていたら、  
今のこの渴きもこれほどまでひりひりと苦しめなかったことだろう。  
あなたはそれがこの上なく痛いと言った。  
私の胸はといえばどんぐりの胸だった。  
そして私はけばだった年配の方のチョッキの中でも、  
愛が成長することを知らなかった。  
恐らく、私は知ることができなかったのだ。  
でも、もしあなたが一人の巨木を覗き込んで、  
眼と眼が向き合ったなら、  
そのとき私はもうどんぐりではなかつただろうに。

それで、12か月前、  
私たちは息をしていた、  
それから空気を落とした。

二人のうちどちらが一番我慢強かったか。

この私の方が最も我慢強かったか。

なぜなら、私は子供で、

空気の価値を知らなかったからか。

もし「年長」であることが多大の苦痛を意味したら、

私は今日、十分年を取っていると確信しています。

ならばいつ、あなたと同じ年になれますか。

一つ誕生日が来ればでしょうか、10回来ればでしょうか。

私に、選ばせて下さい！

ああ、あなたよ、誕生日はもう一つも入りません！

[298] 私は一人きりになることができない。

というのも大勢の客が私を訪れるから。

鍵をすら当惑させる、

名も知れぬ者たち。

彼らは衣服も付けず、名前も持たず、

暦も知らず、どこの土地の産とも知れず、

地の精霊のように

どこにでも棲んでいる。

彼らがやって来るのは、

内なる急使によって知られるが、

彼らが発ったことは分からない。

というのも彼らは決して立ち去りはしないのだから。

[299] あなたの豊かさが、私に貧しさを教えた。

私は、ちょうど少女たちが自慢するような、

こまごま  
細々した宝物を持つ百万長者。

遙かブエノス・アイレスまでも、

あなたは自分の王国を押し広げた、  
一風変わったペルーまでも。  
それで私は全ての貧しさを  
あなたとの人生の財産とした。

金鉱について、私はほとんど知らない。  
知っているのはただ、宝石の名前と、  
最もありふれた宝石の色ぐらい。  
ましてや王冠についてはほとんど何も知らない。

王冠についてはほとんど何も知らないので、私は女王様にお会いしたとき、  
女王様の栄光を知ることができる。  
だがこれは違った富に違いない。  
なぜならそれを掴み損なうと、乞食になってしまいそうだから。

あなたを望み見る者たちにとって、  
それは終日インドです。  
惜しむ心もなく、非難とてなく、  
私はユダヤ人になったって構わない。

きっとそれはコルコンダで、  
私の想像を絶したもの。  
毎日私に対して笑顔を向けてくれるので、  
宝石よりも遙かに素晴らしい。

金きんが存在すると知るだけで、  
少なくとも心が慰められます。  
だが辛うじて間に合ってそれに気付いても、

望み見てその遠い距離を知るのみ。

推量しても余りに遠い財宝。

愛でるにしても余りに遠い真珠。

それは、まだ女学生にすぎなかったとき、

私の素朴な指の間から滑って抜け落ちたのだった。

- [301] 私は思う、この世ははかないと、  
苦しみは絶対的であると、  
多くの者が傷つくと、  
でも、それがどうしたというのだ。

私は思う、私たちは死ぬと、  
最も活力に満ちた者も、  
衰えには勝てないと、  
でも、それがどうしたというのだ。

私は思う、天国では、  
とにかくも、皆が平等となり、  
新たなる平衡ができる、と。  
でも、それがどうしたというのだ。

- [303] 魂は自分自身の仲間を選ぶや、  
そのドアを閉じてしまう。  
その神々しい魂に、  
もはや誰も紹介できない。

自分の家の低い門のところ、  
馬車が止まるのに気づいても気にも止めず、  
土拭きの所に、

皇帝が膝まづいても気にも懸けない。

私には分かる、魂は大勢の人たちの中から  
たった一人を選び、  
それから、関心の弁を閉じてしまったのだ、と。  
石の如くに。

- [305] 恐怖と絶望との間の相違は  
難破の瞬間と  
難破した後との  
相違みたいなもの。

難破後、心は平静となり動かない。  
それはちょうど石膏像の額についた眼のようで、  
見ることがかなわないことを知るゆえに、  
満ち足りている。

- [307] 夏の日を繰り返すことが出来る者は、  
夏の日よりも偉大だ。たとえ彼が  
最も卑小なる人間であったとしても。

彼は、太陽が沈まんとするその時に、  
太陽を再生することができる。  
暮れなずむときにも。

たとえ東洋が老いて、滅び去り、  
西洋を知るものがいなくなっても、  
彼の名はなお残ることだろう。



[308] 「夕陽」を2つほど送ります。

太陽と私とは駈けっこをしました。

私は「夕陽」二つと、「星々」のいくつかを物しました。

一方、太陽はやっと夕陽一つを作っている最中。

太陽の方が夕陽造りでは、それは豪勢でしょうね。

でも、私が友達によく言っていたように、

私の方の「夕陽」はもっと簡便で

手の中に入れてでも運べます。

[318] 太陽がどのように昇ったかお教えしましょう。

暫しはリボンみたいで、

教会の尖塔が紫水晶のなかで揺らめいた。

知らせが、栗鼠のように駆け回り、

丘はボンネットの紐を解き、

ポボリンク鳥が鳴き始めた。

それで私はそっと独りごちた。

「それではあれが太陽だったのかわ」

でも太陽がどのように沈んだのかは、知りません。

紫色した「垣根越し段」があったようで

小さな黄色の少年少女たちが

絶え間なく昇って行くようで、

みんなが向こう側に着き終わったとき、

灰色の服を着た牧師さんが、

日暮の門をやさしそうに掛けてしまって、

そして子供たちの一団を連れ去って行ってしまった。

[319] もう少しでかなえられそうな夢が、実現されないままに遠ざかる。

私たちが追い求める天国は、

学童の前を飛ぶ6月の蜂のように、

競走に誘う。  
身近なクローバーに身を屈め、  
ちょっと触れ、避け、じらし、さっと逃げる。  
それから、天上の雲に向かって  
小尖塔の様に垂直に、軽々と昇っていく。  
嘲るような空をぼかんと見つめる、  
学童のことを気にも留めずに。  
でもあいも変わらぬ蜜が恋しいので、  
あの多種多様の蜜を醸し出す蜜蜂は、  
ああ、きつと逃げはしない。

- [320] 私たちは人造宝石で遊ぶ、  
本物の真珠への資格が得られるまで。  
それから、その人造宝石をポイと捨て、  
自分たちのことを愚かだったわ、と思う。

でも、どちらも形は似ていたし、  
私たちの慣れぬ手は  
まずは鉛ガラスで練習することで、  
宝石の術を学んだことになる。

- [322] 夏の盛りに、その日がやって来た、  
ただ私一人だけのためだけに。  
そのような日は、甦りの約束をされた  
聖者のものとばかり思っていた。

いつもと同じように太陽が輝き出て、  
いつものように花も風に揺れていた。  
あたかも万物を新鮮にする極点を、  
誰も通り過ぎることがないかのようであった。

時は言葉によって汚されることもなく、  
意味ありげな言葉は一語として  
必要でなかった。ちょうど聖餐式で  
神が衣服を付けなくても良いように。

お互い同士、相手に対して封印された教会となり、  
天上のキリストとの将来の晩餐式において  
ぎこちないことがないようにと、  
この度はお互いの和合が許されたのだ。

いかに貪欲な手でしっかりと縋りついて、  
なす術もなく時は滑り去って行き、  
違う国へと向かう別々の船の上から、  
二人は振り返って見つめ合った。

外界に音とてなく、すべての時間が  
滑るかのように漏れ出てしまったとき、  
私たちは相手の十字架を縛りあい、  
その他の約束をする必要とてなかった。

甦りの契りがあり、  
愛の苦悩によって正当なものとされた  
新たな結婚へと向けて、  
私たちはついに、墓を背後に棄て去ったのだ。

[324] ある人たちは教会へ行って安息日を祝いますが、  
私は家に留まって祝います。  
ボボリンク鳥が聖歌隊員で、  
果樹園が教会の丸天井。

ある人たちは白いガウンで安息日を祝いますが、  
私はただ翼をはやすだけ。  
教会の鐘が鳴らないかわりに、  
私たちの小さな寺男が歌います。

有名な牧師さんたる神様ご自身が説教されますし、  
説教は簡潔そのもの。  
そういうわけで、最後にやっと天国へ入るかわりに、  
私はいつでも天国に通っているわけなのです。

[327] 私の眼が消える前に、  
私もまた見たかった。  
ちょうど眼を持つ他の動物たちが  
他の方法を知らないように。

しかしもし私が今日、  
空を自分自身のために持てますよと言われたら、  
私の心はその大きさが足りないゆえ  
きっと破けてしまうことでしょう。

牧場も私のもの、  
山も私のもの、  
全ての森も、惜しげない星も、  
私のかぎりある眼の中で、  
私は昼同様ふんだんに自分のものにできる。

ちょっと水遊びする鳥たちの動きも、  
朝の琥珀色の道も、  
私が好きなときに眺められる私の物。  
そんな知らせは私をきっと打ち殺してしまいます。

だから、思うに、ちょうど私の魂を  
窓枠のところに置いたほうが、  
他の人たちが眼を、太陽に注意を払いもせず、  
窓枠に置くよりも安全。

[328] 一羽の小鳥が小径をやって来た。  
そいつは私が見ていることを知らないで、  
みみずの真中を噛むと  
それを食ってしまった、生のままで。

それからそいつは手近の草から  
露を一呑みした。  
それから、塀の所へ横つ跳びに跳んだ、  
甲虫を通してやろうとして。

そいつは眼をぐるぐるさせ  
せわしそうに周囲を見た。  
眼は怯えたビー玉のようだった。  
そいつはビロードの頭を

危険に瀕しているかのように揺すった、注意深く。  
私は、そいつにパン肩を差し出した。  
すると、そいつはたたんでいた羽を広げると、  
柔らかい身のこなしで、巣の方へと漕ぐ様に飛んでいった。

水脈みまをつけるには銀色すぎる鏡のような  
大洋を掻き分けるオール動きよりも滑らかに、  
真昼の岸边から水もはねずに抜き手を切って飛び立つ蝶よりも  
さらにもっと柔らかな身のこなしで。

[333] 草はほとんど無為自然。  
簡素な緑の野原に、  
ただ蝶々を飛ばせ、  
蜜蜂たちを楽しませながら。

草は一日中、<sup>そよかぜ</sup>微風が運んで来る  
楽しい歌に合わせ、  
日の光りを膝に受け、  
誰彼となく<sup>こらべ</sup>頭を垂れる。

一晩中、真珠みたいな玉露に糸を通し、  
自分を身繕いする。  
そのようなことを見してみるならば、  
公爵夫人も陳腐そのもの。

死んで行くときですら、  
この上なく聖なる香りに包まれて、  
平俗な香木のように横たわって眠る、  
あるいは甘松のように枯れ果てる。

それからは、立派な納屋に居を定め、  
毎日夢を見て過ごす。  
草はほとんど無為自然。  
私が乾草になれたらなあ。

[337] 私は、夏がかくも手強い霜と  
格闘する場所を知っている。  
夏は毎年、雛菊を連れ去って、  
手短かに「敗北せり」と記す。

しかし、南風が池に小波を立て、  
そここの小道に強く吹きつけるとき、  
夏の心は自ら立てた誓いに対し不安を抱く。  
そして夏はやさしいリフレーンを

硬い膝の中に注ぐ。  
そして香料と露とは、  
夏の琥珀色の靴の上で、  
静かに水晶となって固まるのだ。

[338] 神様はきつとどこかに  
沈黙して存在しておられて、  
その類い稀なる<sup>いのち</sup>生命を  
私たちの粗野なる眼から隠しておられる。

それは瞬時の遊び、  
楽しい待ち伏せ。  
至福に対し、  
それ相応の驚きを得させる。

でも、もしこの遊びが  
身を刺し通すまでに真剣になってしまい、  
歓喜が、死の硬直した擬視で  
曇らされるなら、

楽しみも  
あまりに高価なものにみえないか！  
冗談も度が過ぎた、  
ということになりはしまいか！

- [341] 大きな苦痛の後、とり澄ました感情が訪れる。  
神経は墓石のように、形式ぶって座る。  
こわばった心臓は尋ねる、苦痛を耐えたのは「あの人」だったのかと。  
あれは昨日のことだったのか、何世紀も前のことだったのかと。

足は、機械的に歩き回る。  
地面を、空中を、或いはどこでも、  
木の道を、  
全く無頓着になって。  
石のような、石英の満足。

これは鉛の時間で、  
もし生きながらえたなら、思い出すことができよう。  
ちょうど凍え死にする者たちが、雪のことを思い返すようにして。  
まず冷たさ、それから無感覚、ついには失神。

- [347] 夜がそろそろ終り、  
日の出が近いときは、  
私たちは空間に触れることができる。  
それは、髪をなでつけるときであり、

笑窪を用意するときであり、  
あの褪せた真夜中のことを  
十分かまってやれたのか訝しがるときである。  
真夜中は私たちを小一時間ほど震え上がらせたのだったが。

- [359] そろそろと攀じ登ることで、  
私は手に入れた。  
神の恩寵と私との間に伸びていた  
小枝を掴むことで。



それは<sup>たかみ</sup>高処に吊り下がっていて、  
空もまた  
戦略を以てそうしていたのだ。

私は手に入れたと、言った。  
だけど、それだけのこと。  
ご覧なさい、私はそれを落すまい、  
乞食の身分に落ちまいとして、  
何ときつく握っていることか。  
一時間前には満足気な  
乞食の顔をしていたのに、  
一瞬の恩寵によってそれも失ってしまった。

- [365] 白熱した魂をご覧になりたいですか。  
それなら、鍛冶屋の戸の内部に丸くなって御覧なさい。  
赤い色は、火が燃える通常の色です。  
しかし、生き生きとした鉱石が、  
炎の状態を征服したら、  
炉から揺らめき出て来るのは、  
無色で、  
塗油されない炎の色。  
どんな寒村にも鍛冶屋はいて、  
その規則正しい鈍音は、  
優れた炉があることを暗示し、  
炉は音もなく内部で働き続け、  
こうした焦れったそうな鉱石を  
ハンマーと炎で精練するのです。  
そしてついには一定の色をした光が出だすと  
炉そのものを不要とするのです。

- [376] もちろんお祈りしましたよ。  
だからといって神様は気をつけて下さいましたか。  
神様は、小鳥が空中で足を踏み鳴らし  
「頂戴！」と叫ぶ程度の心配しかして下さりませんでした。  
私の理性も人生も、  
神様のためだけに持して来たのに。  
この刺すような惨めさに較べたら、  
むしろ私を原子の墓の中に残して、  
楽しく、無の状態で、陽気で、痺れたままに  
放っておいて下さった方がむしろお慈悲深かったのに。



INDEX OF FIRST LINES OF POEMS TRANSLATED

Following the first lines of the poems are the poem numbers in accordance with those of the Johnson edition. No attempt is made to reproduce the exact punctuation or capitalization of the lines as they appear in the Johnson text.

- A bird came down the walk, 328  
A clock stopped, 287  
A mien to move a queen, 283  
After great pain, a formal feeling comes, 341  
Alone I cannot be, 298  
Before I got my eye put out, 327  
Dare you see a soul at the white heat, 365  
How noteless men and pleiads stand, 282  
How the old mountains drip with sunset, 291  
I gained it so, 359.  
I know a place where summer strives, 337  
I know some lonely houses off the road, 289  
I know that he exists, 338

I'll tell you how the sun rose, 318  
 I reason, earth is short, 301  
 I send two sunsets, 308  
 I went to heaven, 374.  
 If your nerve deny you, 292  
 Of bronze and blaze, 290  
 Of course, I prayed, 376.  
 Some keep the Sabbath going to church, 324  
 That after horror, that 'twas us, 286  
 The difference between despair, 305  
 The drop that wrestles in the sea, 284  
 The grass so little has to do, 333  
 The nearest dream recedes unrealized, 319  
 The one who could repeat the summer day, 307  
 The robin's my criterion for tune, 285  
 The soul selects her own society, 303.  
 There came a day at summer's full, 322  
 'Tis so appalling, it exhilarates, 281  
 To lose one's faith surpass, 377  
 We play at paste, 320  
 When night is almost done, 347  
 Your riches taught me poverty, 299



INDEX OF NUMBERS TRANSLATED (37 POEMS IN ALL.)

281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 289, 290, 291, 292, 295, 296, 298, 299, 301,  
 303, 305, 307, 308, 319, 320, 322, 324, 327, 328, 333, 337, 338, 341, 347, 359,  
 365, 374, 376, 377の計36詩

\*

付 録

拙訳の発表誌一覧表（但し281～380番の詩）

『文学研究』86輯（1989年）：293.

『九大英文学』32号（1989年）：288.

『文学研究』87輯（1990年）：324, 374, 377.

『文学研究』88輯（1991年）：338.

『文学研究』89輯（1992年）：201, 207, 208, 210, 211, 213, 214, 216.

『文学研究』90輯（1993年）：288, 293, 294, 297.

『九大英文学』36号（1993年）：200, 202, 203, 204, 205, 206, 209, 212, 215, 219,  
224, 230, 236, 237, 238, 246, 247, 250, 260, 262, 263, 264, 265, 266,  
270, 271, 272, 273, 274, 275, 277, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287,  
289, 290.

『文学研究』90輯（1994年本号）：281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 289, 290,  
291, 292, 295, 296, 298, 299, 301, 303, 305, 307, 308, 315, 318, 319,